

2020年5月11日(月)

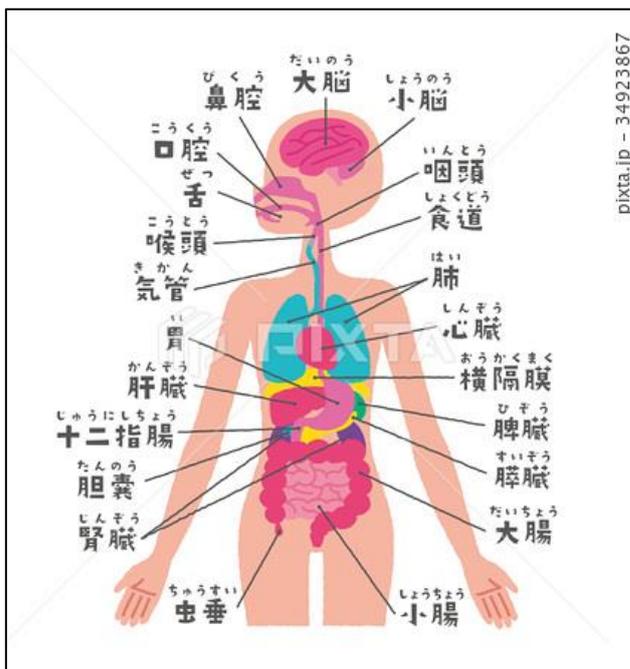
外国語活動 I

講義内容 第2章

第二言語習得に関する知識と外国語教育実践への応用

この章では、第二言語習得に関する基礎的な事項を学びます。中高の英語教員免許取得を目指す学生には「言語習得研究」という科目をかなり深く学ぶことが求められています。小学校で教える場合は、せめて基礎的なことは身に付けておかなければなりません。

たとえば、外科医になる人にとっても、また、内科医になる人にとっても、まずは「生命の維持のメカニズム」を知っている必要があります。どのような状況に陥った時に人は生命を維持することができないのか、というような基礎的なことが分からなければなりません。それが分からずに手術をすることは不可能です。同じように、外国語を指導する教師にとっては、第二言語がどのように習得されていくのかという基礎的な理屈を分かっていると学習者の学習効果を上げることができません。そればかりではなく、外国語を学ぶことに否定的な考えを持つ学習者を作ってしまうことにもなりかねません。



血液はおよそ体重の13分の1
40キログラムの子どものなら何リ
ットルの血液がある？

血液の3分の1以上がなくなると
生命の維持が難しい・・・

(6年生の理科：人と動物の体)

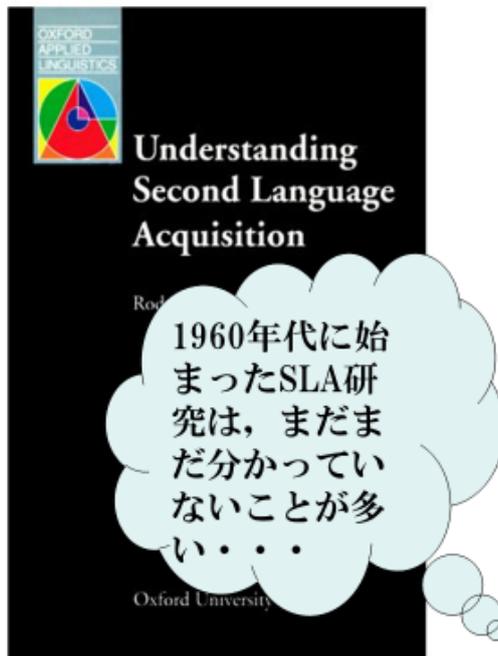
➡けがをしたら、どんなときでも、早く血を止めなければならない
い・・・

とは言っても第二言語習得のプロセスは大変複雑で、かつ様々な要因が関係しており、今でも研究や議論が続いています。ここでは広く受けいれられている考え方を中心に言語習得の研究をみていきたいと思います。

第二言語習得研究の現在

Introduction

The aim of this book is to provide a thorough account of what is known about second language acquisition (SLA). As far as possible the book will **describe, rather than prescribe**; that is, it will not consciously project any single approach or theory of SLA as received opinion. Indeed, this is not possible at the moment, as the study of SLA is still in its infancy and **there are still more questions than answers**.



第二言語習得の理屈を知っていれば、自分が教室で行っている活動が果たして意味のあるものなのか、言語習得に繋がるものであるのかが分かります。ただ、何となくやっていることは、実は何の効果もないかもしれないのです。ですから、この章は特に重要なところと私は考えています。

幸いなことに村野井のテキストは大変複雑で多岐にわたる言語習得研究分野を分かりやすく、かつ簡潔にまとめてくれています。しっかりと読み込んで欲しいと思います。

1. 第二言語習得とは何か

☞ 第二言語と母語は習得のしかたが同じなのか、異なるのか？

似ているところもあるが、異なるところもある

年齢によって似ているところもあるが、異なるところもある

環境によって似ているところもあるが、異なるところもある



☞外国語と第二言語

外国語→その言語が使われていない地域で学習される場合

例：日本で英語を学ぶ場合

第二言語→その言語が使われている地域で学習される場合

例：アメリカで英語を学ぶ場合

なぜ、異なる用語を使うのか？

→教え方が異なる

→目標が異なる

→学習者の動機も異なる etc.

☞TESOL, TEFL, TESLの違いは？

TESOL / Teaching of English to Speakers of Other Languages

英語を母国語としない人に、英語を教える英語教授法。TEFL と TESL の総称。

TEFL / Teaching English as a Foreign Language

英語を母国語としない人に、外国語として英語を教える英語教授法。外国語を教える場合。

TESL / Teaching English as a Second Language

英語を母国語としない人に、第二言語として英語を教える英語教授法。第二言語として教える場合。

※第二言語習得研究からどんなことが分かってきたのか？

※いろいろな考え方を取捨選択することが大切。

※一つの理論だけで解決することは難しい。

(1) インプットの役割

①理解可能なインプット

☞英語のラジオを聞き流しているだけで英語は習得できるのか？

➡FENのラジオを聴いているだけで英語が習得できるか？

☞字幕付き（もしくは字幕なしの）外国語の映画を見ることを通して外国語の習得は可能か？

➡私は韓国ドラマにはまった時期がある。字幕付きのドラマ。韓国語は相当量を聞いた。でもマスターすることはできなかった。なぜか？

☞小学校の外国語で指導者として担任が求められているのはなぜか？

➡児童生徒の現在の能力を的確に把握して、「話の内容はおおむねわかるけれど、新しい語彙や文法が少し入っているインプットを学習者に提供すること（31-32頁）

➡いきなり話せと言われても無理。蓄える時間が必要。小学校ではたっぷり聞かせたい。

沈黙期・インプット

- ・言葉を蓄える(インプットする)期間、つまり黙って聞いている期間がある。



②形・意味・機能の繋がりを理解する。

☞学習指導要領で繰り返される「目的・場面・状況」を設定して英語を教える必要があると
いうのはどういうことか？

You have a pen.
Do you have a pen? Yes, I do. / No, I don't.
you have a notebook. Yes, I do. / No, I don't.
Do you have a notebook?

Do you have a pen? が使われる目的, 場面, 状況は？

Do you have a pen?

どんな聞き方になる？
どんな答え方になる？

15

形→一般動詞の疑問文は Do を前にもってきて作る

意味→「ペンをお持ちですか」という意味である。

機能→貸して欲しいと依頼の機能がある。

③インプットに触れる頻度

☞小学校で Small Talk が導入された意味はどこにあるのか？

☞「外国語活動・外国語研修ガイドブック」(文部科学省)に Small Talk の定義が書いています。「ガイドブック」は私の HP にも up しています。もちろん文科省の HP にもあります。ぜひ、参照してください。自分でどんどん研究してくださいね。



(2) インタラクションの役割

☞新しい学習指導要領では「やり取り」が新たな領域として加わりました。

聞く、話す[発表], 話す[やり取り], 読む, 書く 4領域から5領域へと変わりました。

話す[やり取り]が、話す[発表]と区別されたのはどうしてでしょうか？言語習得にとって「やり取り」はどんな意味や意義があるのでしょうか？

①意味交渉

➡相手は理解できているだろうか？理解できないときは相手にそれを示そう。

②仮説検証

☞なぜペア活動を行う必要があるのか？

☞幼児は母親だけから母語を学ぶのでしょうか？幼児どうしても言葉を学んでいくのでしょうか？

➡インタラクションによって言語の発達を大きく促すことが可能となる。

➡予想（仮説）は検証されるか。自分の言っている言葉が通じた（仮説の検証）

(3) アウトプットの役割

☞なぜ発話を促す必要があるのか？

☞なぜ発表活動をさせるのか？

☞小学校で Small Talk が導入された意味はどこにあるのか？ ➡「外国語活動・外国語研修ガイドブック」

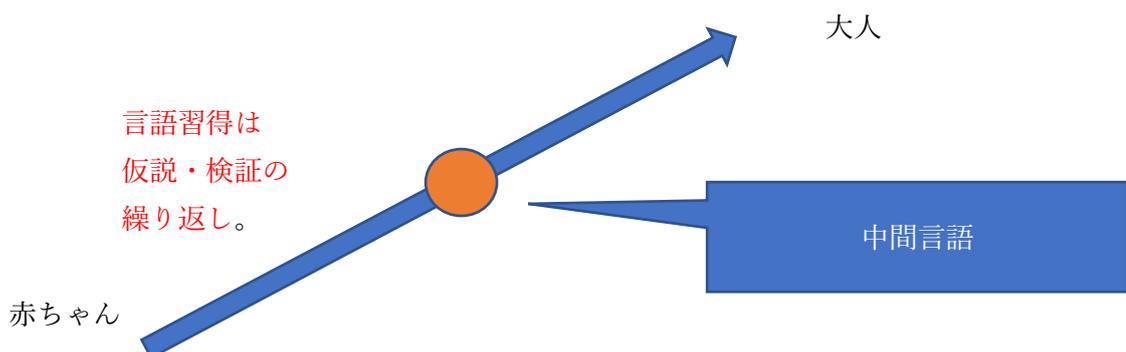
①言語知識の自動化

②弱点の気付きと文法の意識化 自分の穴に気付く

➡理解できていないとすれば自分の発話のどこが問題なのか？

(4) 中間言語システム

☞I went to Tokyo. という発話はなぜ出てくるのか？



1.2 社会文化的アプローチから見た第二言語習得

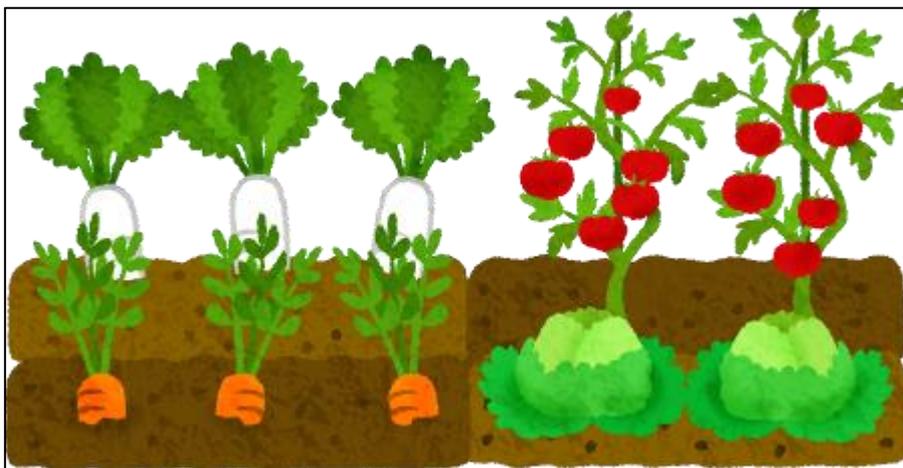
(1) 対話の役割と最近接発達領域(ZDP)

(2) ダイナミック・アセスメント

(3) アフォーダンスと第二言語習得

2 第二言語習得における個人差

☞ 同じ植物なら、同じような肥料や水を与えれば、同じような成長を遂げる。豊かに実った稲田やサトウキビ畑を見るとそう思う。しかし、同じように教室で学んでも、人間の場合は同じようには育たない。なぜか？



2. 1 動機づけ

(1) 内発的動機付けと自律性

☞ 内発的動機づけとは？

☞ 外発的動機づけとは？

☞ 私自身の経験で大学に入学して何が楽しかったかと言えば、自分が学びたいことが学べたこと。高校までは自分が選んで何かを学ぶということはほとんどなかった。大学では自分が学びたいことを学べた！言語学習もそれと同じようなことが言えるか？

①自律性：自分で選択したい。自分で責任を持ちたい

②有能性：自分ではできるという気持ちや達成感を得たい

③関係性：周囲の人、特に「重要な他者」と関わりたい、評価されたい。

(2) 理想的第二言語自己

☞私の個人的な体験では，中学校の英語の先生が外国人の先生と堂々と英語を話しているのを見た時に，自分もあのように英語を使えるようになりたいと強く思ったものである。

☞小学校で運動会や学習発表会を1年生から6年生までの全校でやるのは，どんな意味があるのか？

➡自分も努力すればできそうだと感じる事が大切

2. 2 性格

☞外国語の学習に向いている性格はあるのか？

➡何か新しいものに対して好奇心を持って取り組むことに抵抗を感じない性格を持っている学習者が，第二言語のコミュニケーション能力を育てることに向いている可能性があるといえる。(p.40)

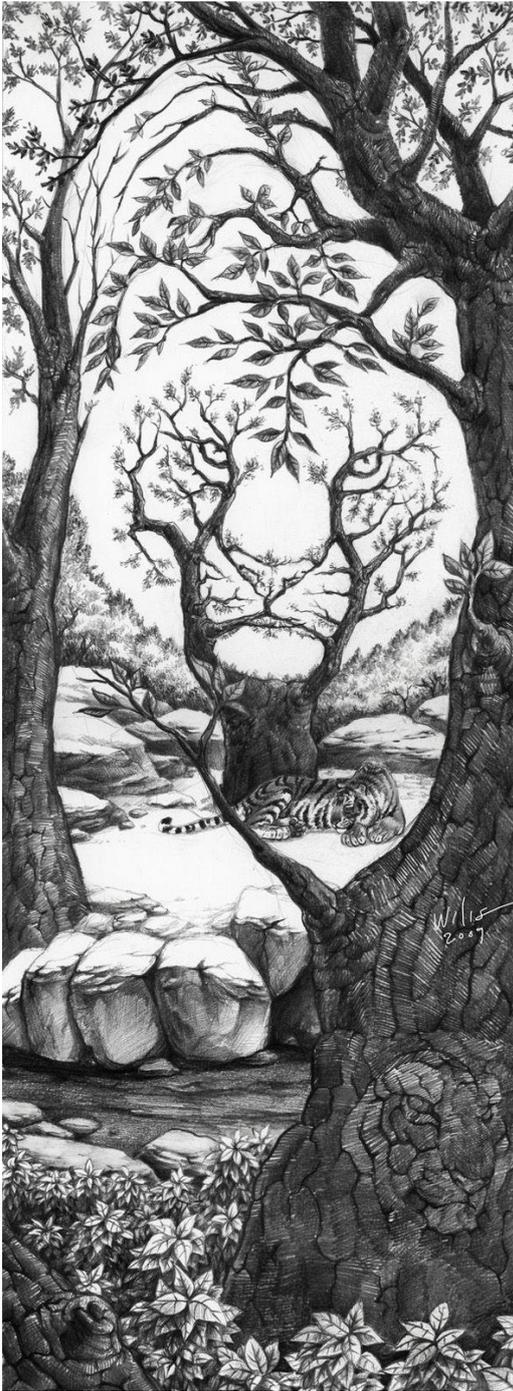
➡第二言語習得のどの側面に焦点を当てるかによって，性格の影響は変化するため，どういった性格の学習者が第二言語習得に向いているか，一概にまとめることはできないが，個々の児童生徒の性格的要因に注意を払いながら，英語指導を実施していくことが教師に求められている。(p.40)

2. 3 認知スタイル

☞同じことを聞いても，捉え方に差があるのはなぜか？







※5月11日（月）はここで終了しました。
※この続きは次回に行います。

2. 4 外国語学習ストラテジー

☞書いて覚えるタイプと読んで覚えるタイプの学習者がいるようです。あなたはどちらですか？

☞新しい学習評価では「主体的に学習に取り組む態度」として「意欲」に加えて「自己調整能力」ということが言われるようになりました。なぜ、「自己調整能力」が重要なのでしょうか？

2. 5 年齢

(1) 言語獲得の臨界期

言語臨界期仮説

Lenneberg: 1967

言語が容易に習得される時期は、ヒトの一生の中でも限られており、その期間は生後2才頃から思春期までであり、この期間中は、子どもは**目標言語に十分接することで、母語、外国語を問わず、無理なく習得できる**。言語習得に適したこの時期を臨界期(critical period)と呼ぶ。

野生児カマラとアマラのケース

1920年、インドのジャングルの狼の穴の中から2人の少女が発見された。カマラ（約8歳）とアマラ（約1歳半）である。



カマラの言語発達

17歳で死亡するまでに覚えた単語は約50語程度であった。



ジニーのケース

2～3歳ごろから監禁状態で育てられる。

外部との言語的な接触は一切なかった。

1970年13歳で発見される。

文法構造や表現、言語理解や言語表現などにおいて成人なみになることはなかった。



(2) バルセロナ年齢要因プロジェクト

☞ 学習開始年齢だけではなんとも言えない

☞ 年齢は一つの要因ではあるが、全ての技能に当てはまるものではない。「聞く」「話す」に与える影響と「読む」「書く」に与える影響は異なっている。

☞ ネイティブレベルの英語力を身に付けることを目標とする場合は年齢が大きな影響を与えそうです。しかし必ずしもネイティブレベルではないとしたら・・・

3 第二言語指導の効果についての研究

3. 1 意味重視の言語活動

3. 2 フォーカスオンフォーム

3. 3 タスクの活用